

楽天Car車検で、何度もAwardを受賞しているヤマヒロ・apollostationセルフ一之江SS（以下、一之江SS）。江戸川区のクチコミでナンバーも獲得している。その中軸となる指定工場では日本人スタッフほか、インドネシアからの技能実習生（以下、実習生）らが働いている。同社は7〜8年前から実習生の受け入れを始めたという。

外国人技能実習制度は「人材育成、技術移転を目的とした国際貢献」だが、2027年4月1日に廃止され「人材の育成と確保を目的とした『育成就労制度』へと移行」する。SSのみならず、人手不足解消につながるとして関心を集めている。

現在、同社に在籍する実習生は、インドネシア人約

KEY P LAYER
キープレイヤー
今月の人

ヤマヒロはインドネシアからの技能実習生約20名を受け入れている。うち5名がセルフ一之江SSで、西澤功さんら日本人スタッフから学んでいる。車検を中心に展開する同店。実習生のスキルアップで、さらなる効率化を目指すという。

NISHIZAWA Isao

西澤 功

ヤマヒロ
apollostationセルフ一之江SS
(出光系=東京都江戸川区)

外国人技能実習制度から「育成就労制度」へ
車検・整備事業の強化に向け、外国人材を確保する

20名。うち5名が一之江SSで学んでいるほか、特定技能1号資格者も1名在籍している。

今回は、実際の受け入れの現場で、実習生たちの指導にあたる西澤功さん（50）に話を聞いた。

**技術と安全確認
丁寧な仕事を教える**

一之江SSで整備士資格を持つ日本人スタッフは4名。検査員資格を持つ西澤さんは、工場の責任者を務めている。

実習生は10代後半から20代前半の若者で、日本滞在歴は3カ月〜2年半（4月上旬現在）。日本人スタッフの下で、タイヤ交換等の作業を受け持っている。

西澤さんは「大丈夫?」「OK?」等と、絶えず彼ら

に話しかける。技術の指導だけではなく、安全確認やお客さまのために丁寧な仕事をするのが大切ということを日々、繰り返す。

実習生のリズキさんに、タイヤを一本一本ビニール袋で包んで車に積み込む作業について尋ねてみると、「お客さまのためにも、良いことだと思おう」と、流ちょうな日本語で返ってきた。2年半の滞中で、日本の丁寧な仕事がいよいよ身に付いたようだ。

西澤さんは各実習生のスキルマップを作成して目標を定め、成長過程を確認していく。彼らに任せる作業もあるが「最後は必ず日本人スタッフが確認する」。

実習生らとは食事会やイベントを通して、親交を深めている。生活面の相談に乗



右から3人目が西澤さん

プロフィール

西澤功 にしざわ いさお
1976年、東京都杉並区生まれ。自動車整備の専門学校を卒業後、車検専門店に就職。2023年、ヤマヒロに転職。西府SSを経て24年から一之江SSに勤務。資格は整備士2級、自動車検査員。外国人技能実習生活指導員

沿革

ヤマヒロ
1950年、山口油店開業。52年、山廣商店を創立。89年、ヤマヒロ設立。2008年、レンタカー事業開始。16年、車検の速太郎オープン。21年、アポロステーション全国1号店オープン。現在、東京都と埼玉県で35SSを運営。平雄太郎社長

ヤマヒロ・セルフ一之江SS
出光系 東京都江戸川区





実習生を豊かにしてあげたい

まだまだ整備士を確保したい

西澤さんは自動車整備の専門学校を卒業後、車検専門店で就職。23年にヤマヒロに転職した。理由は「前職で

限界を感じていた。当時の同僚からヤマヒロを紹介され、挑戦してみたい、と。ヤマヒロならいろいろな勉強ができ、世界が拡がると感じた」から。セルフ西府SS（府中市）を経て、一之江SSに勤務し

て2年になる。冒頭で述べた通り「車検は好調」で、検査員として多忙な日々を送る。転職の理由が「世界を拡げたい」だったが、まさか「採用のために、インドネシアに行くことになる」とは夢に

も思わなかった」と笑う。「実習生に任せられる業務が増えれば、効率が上がる」と、彼らのスキルアップに尽力する。

「まだまだ整備士を確保したい」（南波部長）という同社は、今後も実習生を採用する予定という。実習生から特定技能者へのスキルアップ、来年の制度変更により、持続的な人材確保が可能になる。

ヤマヒロは今年3月、SS業界で初めて「日本のサービスイノベーション2025」に選出された。「顧客の事前期待を上回るサービス提供と顧客満足と従業員満足の好循環を生み出すことを志向している」点が高く評価された。今後も業界の先駆者として、さまざまな歩を進めていく。

インドネシアまで採用の面接に行く

外国人技能実習制度を利用するには、監理団体を通すのが一般的だ。監理団体は非営利で、実習生を受け入れ、企業等で技能実習を実施する。

ヤマヒロでは23年から東京人材開発センターを通して実習生を受け入れている。同センターの母体は、出光系SSを運営する旭商事（本社・東京都文京区）である。

同センターは、インドネシアの整備専門高校を通して実習生の募集を行うほか、

面接のサポートや入国・ビザの手続き、日本語の研修等を担う。来日後は定期的なヒアリングや監査を通して「仕事以外の雑務を行う」と、監理責任者の古川大輔マネージャー。

今年1月、ヤマヒロの平雄太郎社長と第1事業部の南波舞部長、西澤さんはインドネシアの中部、テマングン県に赴いて面接をしたという。

ヤマヒロは「ファミリー（社員、家族）を大切に企業風土がある」と南波部長。「どの人と働きたいか？」を念頭に「元氣・笑顔・家族思い・仲間を大切に人物」を採用のポイントにしたという。

西澤さんは「一緒に仕事をやる者として、現地の様子を見られたことは本当に

良かった。日本の技術を学びたいという目的のほか、姉妹の学費を稼ぎたいなど家族思いの人がとても多かった。この経験を経て、実習生をより大切にしたいと思うようになった。彼らを豊かにしてあげたい」と振り返った。

インドネシアの人材を登用する理由を、古川マネージャーは次のように話す。「インドネシアは日本車が9割を占めているが、整備はこれから発展していく国。日本で技術を学ぶ価値があり、スムーズな募集活動が行える。何より親日的で、実習生は柔軟な対応力がある」。

実習生の受け入れで心配されるのが失踪や犯罪等だが、同センターの監理になつて以降「トラブルはない」と南波部長はきっぱりと話す。



実習生
リズキさん(21)
ブカシ市出身
機械が好きで、車の整備を知りたいと思って応募し

た。プレーキパットの交換は、日本で初めて経験した。来日後の日本語は独学だが、日本語能力試験でN3（日常的な場面ですでに理解できる）の認定を受けることができた。インドネシアでは仕事探しが大変。特定技能を得ることができるよう頑張りたい。



特定技能1号
アーマドさん(30)
バンドン市出身
実習生の3年を経て、いったん帰国したが、仕事が

見つからず、再来日。今は1人暮らしをしている。インドネシアには日本車がたくさん走っているが、車種に偏りがある。プリウスやスポーツカー、軽自動車、左ハンドルの車はない。私は日本車が大好き。いずれは母国で整備工場を開くという夢ができた。